

琉球大学学術リポジトリ

研究室紹介（県農業試験場園芸支場花き育種研究室）

メタデータ	言語: 出版者: 沖縄農業研究会 公開日: 2009-04-21 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/0002017172

県農業試験場園芸支場花き育種研究室

本県の花き園芸は復帰後の優等生と別称を与えられるほどの有望産業に育った。花き研究室において、品目の選定、それに伴う栽培技術の開発、定着化が精力的に行われてきた。しかし本県は亜熱帯地域に属し、他県で開発された品目、品種、技術等のストレートな導入は困難であり、本県におけるオリジナル品目、品種の開発への要望が高まり、1987年に園芸育種研究室が設置された。園芸育種研究室においては花きと野菜の育種が行われ、花き育種はキク、デンファレの交雑育種、キク、バラ、レッドジンジャー、サンタンカの放射線突然変異育種が行われた。キクの交雑育種では1988年に、沖の園×フリーミー、ニューキャッスル×フリーミー、シルビア×フリーミーから選抜した系統を1993年に現地実証試験を行い高い評価を受けた。デンファレについては育種素材の選抜が行われている。

キクに放射線を照射し花色変異を固定したIRB88-30、IRB88-47、IRB88-59、IRB88-60、OHB8、OHB14等を品種登録した。レッドジンジャー、サンタンカは放射線を照射し、花色、葉色、草姿の優れた系統を選抜中である。また、組織培養に関する試験も当研究室で取り扱われており、デンファレ、レッドジンジャーの大量増殖技術が確立され、アンスリウムの大量増殖技術の確立を急いでいる。

花き育種研究室と野菜育種研究室に分離したのは1994年で、花き育種研究室はできたてのほやほやである。本研究室は室長を含め研究員2名、農業技術補助員2名の小さな所帯ではあるが課された課題は多い。早急に取り組まねばならない課題として「夏秋ギクの育成」がある。現在本県で栽培されているキクは、ほとんど

が短日低温で花芽分化し開花する秋ギクで、作型限界は無理しても5月の上旬である。しかし、農業人口の老齢化による労働力の質、量の低下は花き園芸においても顕著で、しかも冬春期集中出荷栽培体系では過重労働、市場対応、輸送等において改善への要望が高く、省力化と同時に作期の拡大が急がれている。

作期の拡大を図るため高温、長日条件でも開花遅延が少なく、7月まで正常に開花する夏秋ギクの導入定着化計画が進められているが、カタログ等に提示されている開花期は、育成地の気象条件において当てはまるもので、あまり当てにならないと言われている。このようなことから、本県の気象条件に合った夏秋ギク品種を育成することは、重要な課題と認識している。

しかし、夏秋ギクの育成は重要であるが、現在行われている秋小ギクの育成の中断が許されるわけではない。本県のキク切り花生産は、63%を小ギクが占める小ギク偏重の栽培体系で、特に冬春期の小ギク生産は本県の独断場であり、生産コントロールが必要になりつつある。キク切り花栽培を更に発展させるには、輪ギク及びブスプレーギクの栽培拡大が必要であり、これらの品種育成も急がれる課題である。

この様に本県花き産業のメインであるキクの育種を行うと同時に、欲をいえば亜熱帯の沖縄ならではの品目、例えばアンスリウム、クルクマ、ジンジャー類、ヘリコニア類の品種育成も行いたいし、世界各地の熱帯性の有望な花きの導入及び遺伝子の導入も図りたい、所帯は小さいながらも夢と希望の大きな研究室で、皆様のご支援ご鞭撻をお願いしておきたい。

(金城栄子)